

新しい自転車

昭和四十八年度 五年 男児

最近になってぼくは新しい自転車を買ってもらった。三年生頃まではようち園のとき買ってもらった小さな自転車に乗っていた。それはすごく乗りやすくてよかったけれども、東大町にひっこしてきたら同級生のほとんどがスポーツ車にのっていた。ぼくは「あんなのがほしいな。」といつも思っていた。だから「スポーツ車買って。」となんども父にいったが、「六年生になったら買ってくいる。」というだけで買ってくれなかった。

それからしばらくして公園で遊んでいたら母がよびにきた。家に帰ってみると自転車屋が米っていた。「ヤッホー。自転車買ってくれんな。」と喜こんだ。しかし自転車は母とけん用のミニサイクルだった。自転車屋がいろいろ使い方をおしえているとき、ぼくは「ふうー。」といっけてきいていたが、心の中では「なんだミニサイクルなんて。」と思っていた。それでも乗りまわしているうちに乗りいいようになってきた。すこ

くブレーキがきくので。スピンをしたりして遊んだ。スピンというのは急ブレーキをかけて半回転するのだ。友だちと何回転したか競争してとてもおもしろかった。でも先生にそのことが知れてあぶないからやめるように注意された。その後もおもしろいので時々やってもこの自転車は困ったことがある。それはあまりブレーキがききすぎるので、サイクリングのとき坂道で急にブレーキをかけると、スリップして前の自転車にぶつかりそうになることだ。やっぱりスポーツ車がほしくて父にたのんだが

「六年生になってから買ってやる。」といっけてだめだった。五年生の十月ごろ、学校から帰ると父は大沼のちらしを持って大沼へ連れて行った。六階に自転車の展示場があつて、そこへ行くと父は「悟、どんないがえらんでみれ。」といっけた。ぼくはスポーツ車の小さい方をえらぼうとしたが、フラシヤーがかつこ悪かつたので大きい方をえらんだが、足がつかなくかつた。あきらめて父が知っている自転車屋へ行

そこにかざられている自転車を見せてもらって、いろいろ説明を聞いた。スポーツ車は一台しかなかった。のでそれを買うことにした。ぼくは

「ちょっと気に入らねどごあっちゃ。」といったら父が「どこや。」と聞いた。

「だってブザーの所がでっばってるからな。」といったら父は

「そいだば、しょうがねでんだの。」といった。高さを調節してもらってるそばで、ぼくはじっと見ていた。何となくおちつかなかった。外はもう暗くなっていた。父の車の後から新しい自転車に乗ってついて帰った。高さもちょうどよく、乗りごこちがよかった。

次の日。スポーツ少年団に行くとき乗っていったら、敏文君が

「おう、竹ちゃん、いづ買ったなや。」といった。まわりにいる友達もじろじろ見ているような気がしてはずかしかった。天気の良い日はいつもスポーツ車に乗っている。スピードもでるし乗りごこちも満点だ。すごくかっこいい。ぼくは毎日楽しい。前のようならんぼうな運転はやめて大切に使おうと思っている。